

# 埴 生・竹 亭 焼

木 村 弘 道

## 序

富山県の一寒村で焼かれた竹亭焼は、近年ますます識者の間で高く評価され、美術館等にも、その作品は陳列される様になり、研究も進められつつある。

しかし、竹亭焼はもともと趣味から発展した焼物で、最近までその地方で云々されながらも、本格的に比較検討される機会があまりなく、その研究資料もほとんど散逸してしまつた。竹亭焼の窯元であつた太田家は現在も続いているが、ここにも断片的な文書や数点の作品等が残されているにすぎず、また、太田家の菩提寺と云われる石川県津幡町の永照寺も昭和19年に火災のため、過去帳等も全て焼失してしまつた。

また、当地方には竹亭焼と称する作品は多数現存しているが、もともと在銘の作品が少いのと、竹亭には三代あるので、どれが何代の作品であるのか、その鑑別も大分混乱している様である。

本稿は、竹亭焼の蒐集家である太田作平氏の御援助によりまとめたものである。

## 家 系

初代竹亭は太田家の20代といわれ、埴生村の名家に生れた。

太田家の先祖は能登国から来たとい伝えられているが、太田家の様子がおぼろげながら解るのは17代からで、それ以前のことはほとんど解らない。現在解つている17代から初代竹亭までの家系を記せば次の如くである。

太田家の17代は左次兵衛と云い、石動の尾張屋庄兵衛の娘を妻とし、その間に生れたのが18代伝右衛門で、伝右衛門は埴生の清右衛門の娘と結婚し、19代三郎右衛門が生れた。この三郎右衛門と福光の七兵衛の伯母の間に生れた20代の佐次兵衛が初代竹亭である。

次に太田家の家柄についてふれておきたい。

太田家というのは17代の左次兵衛が、延宝5年8月に浅地十村孫九郎の跡を受けて「十村」を命ぜられてから以後、代々「十村」「山廻り役」「新田裁許」等の公職を仰付られた名家である。

「十村」と云うのは、他藩の庄屋に相当する役目である。初め十カ村内外を支配下におさめたことから出来た名称で、郷土や長百姓より任命され、田地および御収納米を司り、藩内の風紀の取締りや、戸籍のことを役目とした。

また「山廻り役」は、木材の伐採許可および、山地の異動や植林などの監督等を役目とし、「新田裁許」は新開地の許可や年貢の裁定等を役目とした。

この様な公職を仰付けられた歴代の中には「十村」で藩より扶持を給せられた中でも、最高の扶持人十村になつた人や、代官米二千石も賜つた人、また、多年の功勞に依つて苗字帯刀を許された人もある。

屋敷は富山県小矢部市埴生の八幡宮の近くにあつて、家屋のほとんどは檜材で出来ており、その後やや改築されているが、その昔は現在の数倍もあつたそうである。

また、邸内に大きな「百石目」と称する石がある。この石は、ある飢饉の年に農民に救米を施す意味で山から大きな石を引かせ米を与えた、その米が百石に達したのでその名が付いたと伝えられている。

かくの如き名家で、豪壯な邸宅であつたから、藩主が参観交替や鷹狩等の際には度々休憩や宿泊をせられた。

寛政2年加賀藩の御広敷御女中45名の宿泊を仰付けられ、翌々年にはこれ等一行の昼食を仰付けられたと云うことである。

また、幕府から地方藩の行政や民情などの視察に派遣された巡見御上使の一行の宿泊も仰付けられた。当時藩では御上使巡見の知らせを受けると、道路や橋梁の清掃、修繕等は勿論のこと、その応接や接待には非常に心を配り、町村の肝煎などには予め質問を受けそうな問題と、その答え方を書いて渡し、他の答をさせない様に要心したほどである。その様な巡見御上使の一行の宿泊を仰付けられると云うことは大変なことであつた。

以上の様なことから如何にこの地方での名望家であつたかが解る。

また、歴代のなかには、和歌、俳諧を嗜んだり、当時では珍重せられたインコを初め文鳥や鶯、コマドリ等の小鳥を飼つたり、シヤボテンを集める等種々趣味深い人々がいる。

特に茶道には歴代仲々の名手であつたらしく、竹亭焼の発祥も茶道を通じてであつた。

### 初代竹亭

初代竹亭は本名を太田佐次兵衛と云い、太田家19代の三郎右衛門と福光の七兵衛の伯母と

の間に、埴生村で生れたと云われ、竹を好み竹亭と号した。

その出生の確かなことは解らないが、寛政3年に61才で歿したと云われている。

初代竹亭は長じて福光町の七兵衛の娘を娶り、娘があつた様であるが、名前等細いことは全く不明である。

竹亭は御扶持人十村となり、その公務のかたわら風流の道を嗜み、特に茶道に凝り度々茶会を催したりしていた。その結果茶事用の陶磁器に非常な趣味を持つこととなり、自ら製陶に携はる様になつた。すなわち、邸内に楽焼窯を築き加賀の大樋焼に倣つて楽焼を始めた。

黒楽も時に試みたと云われるが現存の作品から見ればいわゆる大樋の飴釉と云われる黄褐色の楽焼を主に焼いた様である。

製陶の技術を誰に習つたのかその師は解らないが、釉薬は大樋の4代あたりによく似たところがある。その作品は、茶事用の小品がほとんどで、茶碗、香炉、香合、水指等がその主なもので、作品に銘は入れておらず、共箱のものも全くない様である。その出来ばえは、あくまでも趣味的なもので、まだ素人の域を出ていない。しかし、そこには職人仕事には見られない、素朴な味わいがあつて、小さな香合などのなかには愛すべき作品がある。

次に初代竹亭が製陶する上に最も大きな影響を与えたと思われる大樋焼について簡単にふれておきたい。

#### 〔大 樋 焼〕

大樋焼というのは加賀金沢の楽焼である。寛文6年3月加賀藩主5代の前田綱紀が京都から茶人の千宗室を招いた時、伴つて来た陶工長左衛門が金沢の北の町はずれの大樋に窯を築き宗室の考按に基いて種々茶器を製作し、それを大樋焼と称し、姓も大樋と改めた。これが初代大樋である。

この長左衛門は河内国の住人で土師長三安敏と称するものの23代の孫で、安敏は寛平のころ菅原道寛に仕えた雑掌であつたが、道寛が謫流の後、土師村に住して土師を姓とし代々土器を作つていたといわれている。

長左衛門になつて明暦2年29才の時、京都に出て二条河原町に住し、楽一入齋吉兵衛に師事して楽焼の法を学んだという。長左衛門は寛永7年に生れ、幼名を長二といい、金沢へ来たのは40才のときで、浅野村の五兵衛という老人と原料の土をさがし廻り、大樋村の近くに

赤色で良質の土を発見した。試作品も良好であつたので藩公も喜ばれ、山ノ上村清水に陶器製造用地を賜わり、藩の御用窯として開窯され、多数の優れた作品を製し、正徳2年正月83才で歿した。2代長左衛門、3代勘兵衛、4代勘兵衛、5代勘兵衛、6代朔太郎、7代道忠と子孫相継いで加賀藩の御用を勤め、禄仕して、お茶道具を調進して来た。

しかし、明治の廃藩に座して一時その業を罷め、同17年に再び金沢の春日町に開窯したが、微々として振わず、ついに同30年業を奈良理吉に譲り永年相承の陶家は焼物から離れてしまった。

奈良理吉は若年のころより茶事を嗜み製陶を志し、その法を道忠に学んだ。既に大樋宗家の不振を惜み明治30年7代道忠より大樋の業統を受け、8代大樋長左衛門と名乗った。現在は9代で、昭和2年その名を襲うた。

大樋代々のうち、初代長左衛門に次ぐ技巧の優れているのは5代勘兵衛である。恰かも文化、文政のころ加賀藩工芸の爛熟期に際し得意の技能を發揮して、家伝の楽焼をよくせる外に、種々の型物や上絵附物などをも作つて近世の名工と称された。

大樋焼の第一の特色は飴色の上釉にある。焼物の製法は楽焼の様式を取入れたものであるが、その飴釉は中国古代の三彩の飴釉を学び工夫されたものという。

## 二代竹亭

初代竹亭すなわち太田家20代の佐次兵衛は福光の七兵衛の娘を妻とし、その間に娘は生れたが男子はなかつた。それで、その娘に埴生村の百姓十右衛門の嫡子である、三郎兵衛を婿養子に迎えた。

三郎兵衛は病氣勝ちで余り公職にもつくことなく、寛政10年12月56歳で病死した。

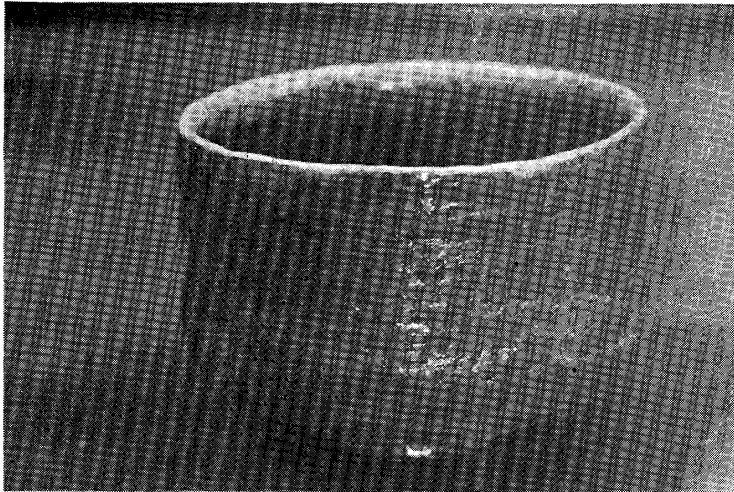
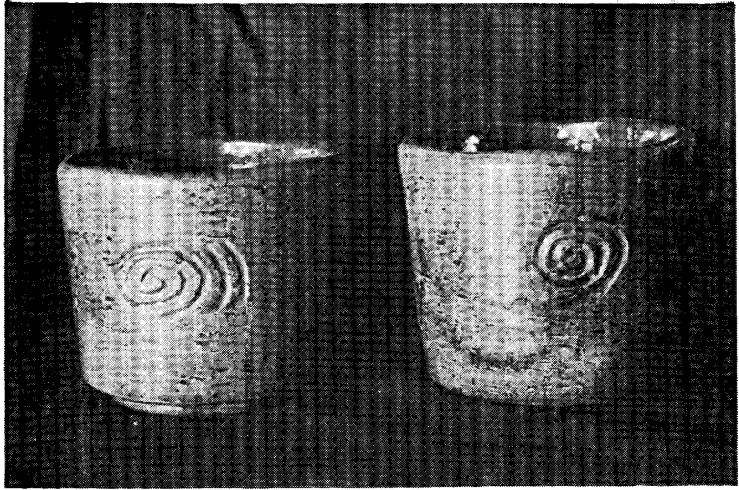
また、三郎兵衛が製陶に関係したということは全く聞かない。しかし、この三郎兵衛の嫡子として安永元年に生れたのが、太田家22代の伝右衛門でこれが2代竹亭である。

伝右衛門は長じて、山廻役や新田裁許、十村等の公職を度々仰付けられ、退職後も無役年寄列と称する待遇を受けた。

伝右衛門は茶道を好み、千家の後見暇樂庵澤宗匠に教を受け、書道は瀧本流を学んだ。幼少のころより祖父の初代竹亭佐次兵衛より楽焼の法を教えられ柳溪と号して、盛んに楽焼を作り、祖父の死後竹亭を襲号した。

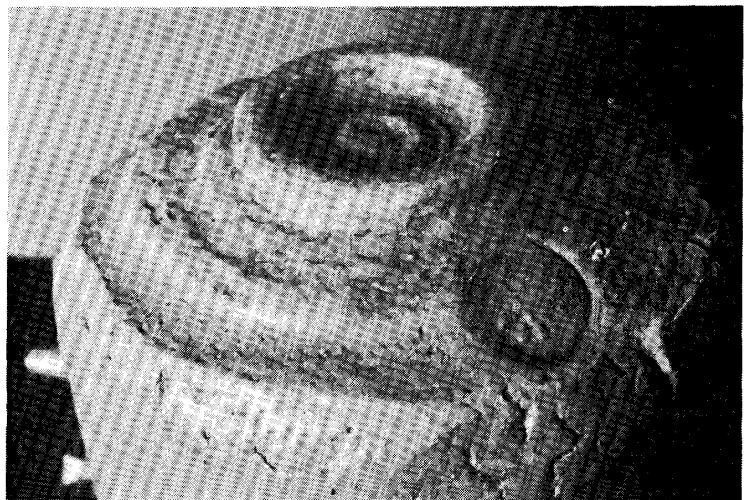
しかし、伝右衛門は祖父から伝授された技法だけでは慊きたらず、楽焼の本場において更

①



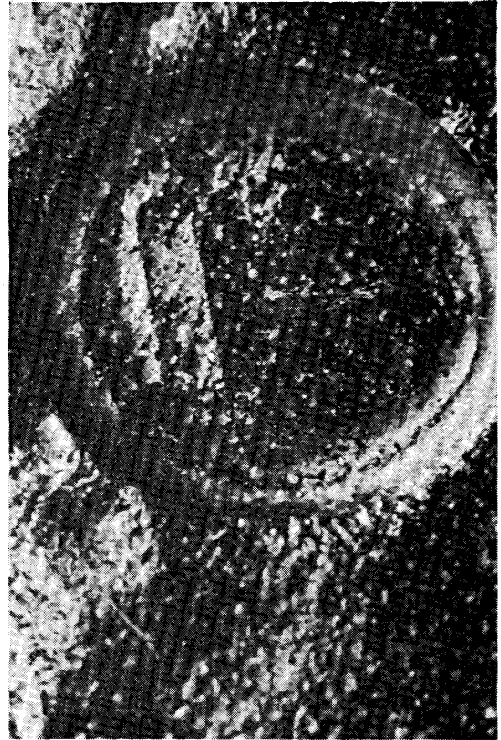
②

③





④



⑤



⑥

⑦

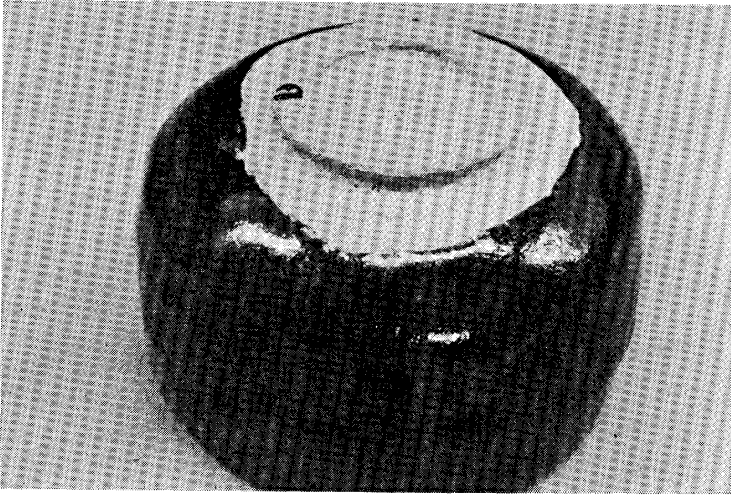


⑧

⑨

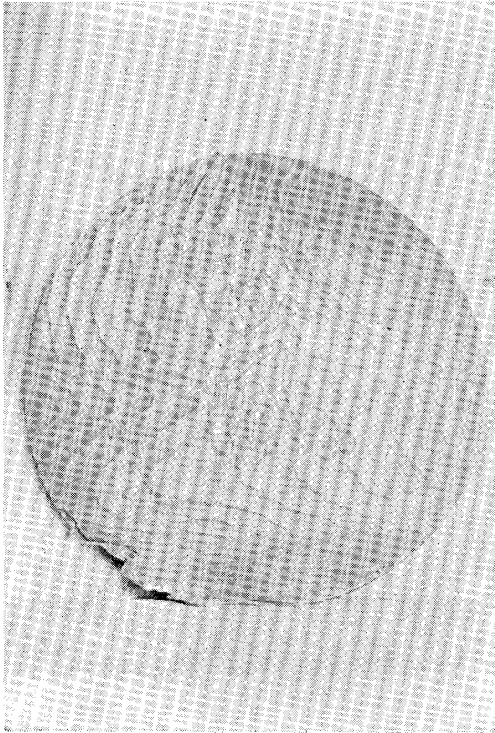
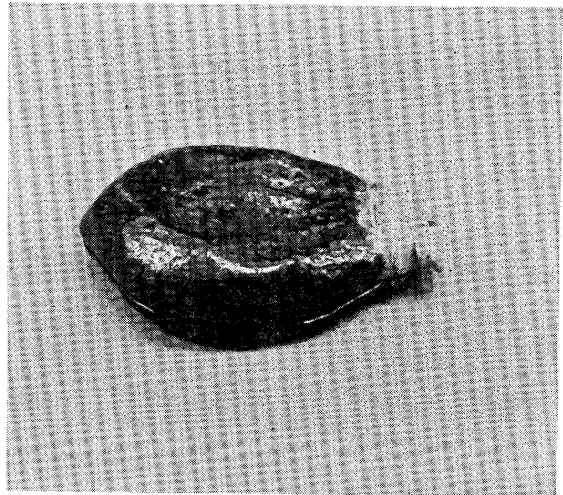






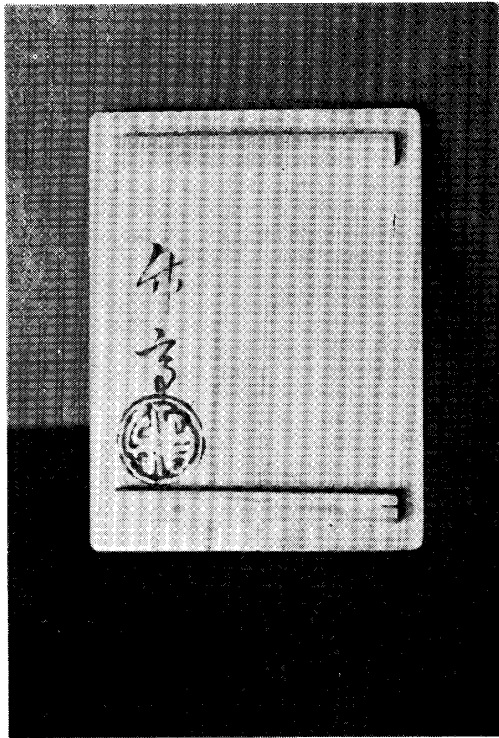
⑩

⑪

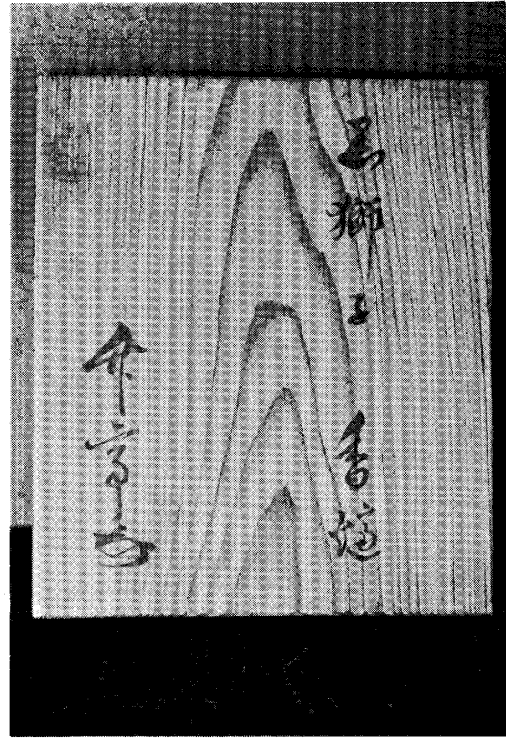


⑫

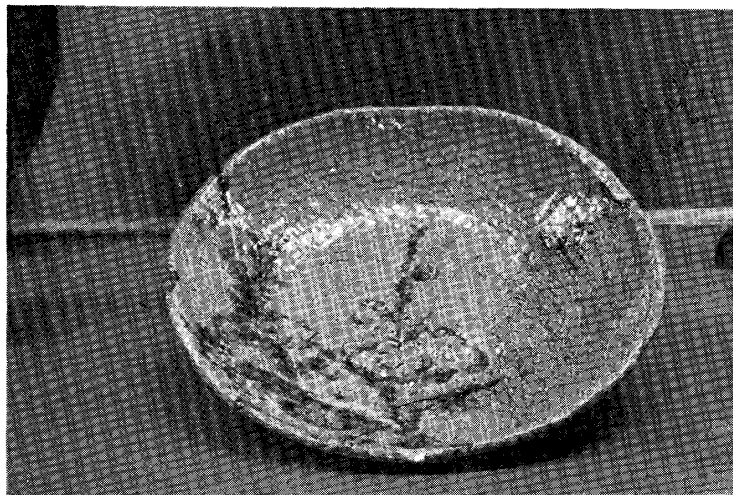




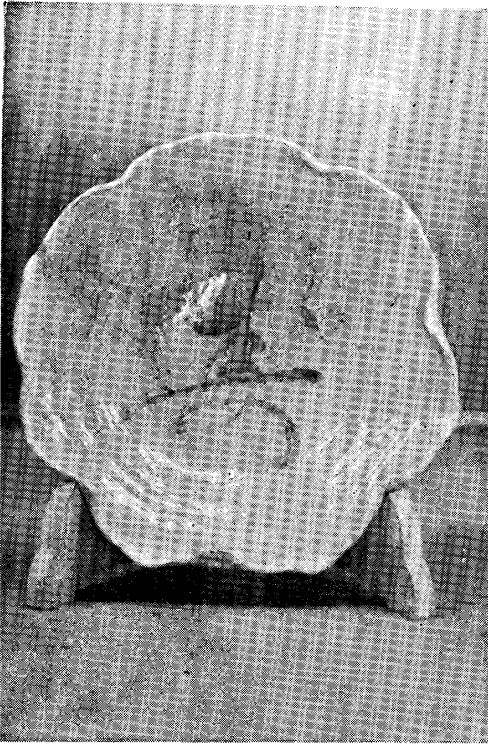
⑬



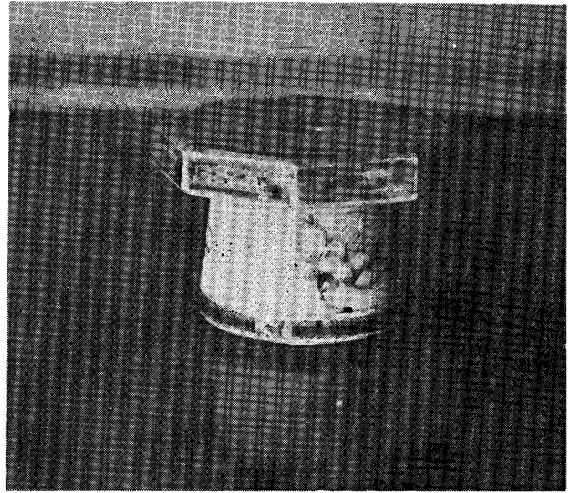
⑭



⑮



16



17



18

に蘊奥を極めんと欲し、次男の大三郎を伴つて京都に赴き五条坂の茶碗屋長兵衛に寄寓し、数年間技倆をみがき、文政5年帰郷した。

在京中には知恩院門跡尊超親王や大納言庭田公等、高貴の知遇も得た。庭田公より竹亭作の黒茶碗に「紫」の銘を賜り、また尊超親王は度々寓居にも台臨せられ、楽焼合作の光栄にも浴し、竹亭の帰郷に際しては、竹亭作の茶碗の箱に和歌を書き、その茶碗に「唐錦」の銘を賜わつた。

山本久著作「越中製陶史稿」に「太田傳右衛門之遺墨」として次の文書が録されている。御自歌も御持參被爲成御坐可遣との御意之有之良正院持僧宿迄に而奉戴難有歌と言語申盡難仕合也

且其日は良正院在寺無之所に御成被爲而遣との御意御坐候事

思ふとち まとむ勢る夜は唐錦

たたまくおしき ものにぞ 有ける

御印 超

此歌の心にて唐錦と名けぬ

文政五年午七月十八日

華頂山於良正院

尊超法親王御銘写

この文書には「御自歌云々」と云つてゐるが、この歌は古今集卷第十七雑歌の部の中に「読人しらず題識らず」として出ている。親王はそれを御染筆になり、竹亭の帰郷に際して惜別の情を以て賜わつたのを、竹亭は御自歌と思違したのであろう。

なお、「越中製陶史稿」にはこの茶碗の写真のをせ、次の如き解説がある。

「尊超法親王が唐錦と御銘付遊され箱蓋に

思ふとち 圓居せる夜は 唐錦

たゝまおしき ものにぞ 有ける

此歌の心にて からにきと名けぬ 花押

の御染筆があつて竹亭が京師に学ぶ頃の楽焼茶碗で、全面焦茶色釉薬を施し、淋趣秋景の風格を潜めた逸品である。」

竹亭が特に知遇を得た知恩院門跡尊超親王というのは、有栖川宮第六代織仁親王の第八王

子で、享和2年7月10日に御誕生になり、御幼称を種宮といつた。文化2年8月7日知恩院門室を相続され、5年2月内々知恩院に移居せられ、7年4月27日親王宣下あつて名を福道と賜つた。9月27日入寺得度して法諱を尊超と称されたが、嘉永5年7月7日病にて御年51才で薨去された。

親王は聡明穎知学徳兼備され一宗の衆望を負い、夙に教綱を振張し、宗光の発揚、宗門の興隆に尽瘁せられ、その遺徳はいまもなお追敬せられている。

竹亭の京都におけるその間の事情を「越中史料」に次の如く出ている。

「京都に出て五条坂茶碗屋長兵衛方に寓す。知恩院の宮尊超親王の御愛顧を蒙り屢々旅寓へ光臨御伝授ありて御手製もあり竹亭の茶碗に「唐錦」と銘せられ御自作の香合も下賜ありて、畏くも殿下と合作の香合杯も今なほ所蔵せり「紫」と銘を賜わり、殊に饗饌を被下たりと云う、将花頂山を辞し帰国の節は今一度上京すべしと下命ありしも幾年ならずして此宮も薨去あり、竹亭も文政8年行年54にて帰泉せしに依り再度の上京せざる也」

この様な高貴の人達との交際は、竹亭に大きな影響をあたえ、亭竹の作風を田舎の趣味人の域から脱し、都会的な洗練を加えることになつたと思われる。

しかし、竹亭が文化、文政時代の京都で修業をしたことは、全ての面において良い結果をもたらしたとはいえない様である。

当時の京都の陶芸界には時代の風潮もあり、仁阿弥道八、青木木米、永楽保全等の陶工が多彩な技巧を競つており、色絵等のものは勿論、楽焼のようなものの釉薬にも、種々と工夫をこらし変化を求めることが流行していた。竹亭もそうした空気の影響を強くうけ、ことさら派手な変化を求める傾向があつた様である。

竹亭は文政5年帰郷し、邸内の窯で多数の名品を作つた。特に黒茶碗に金、銀、銅等の細かい粒をちりばめた金星、銀星、銅星と称する逸品を作つたので、爾来その名声があがり、識者の訪問も多く、また教えを受ける者も多くなつた。

高岡の瑞竜寺の藏六和尚も、請うて門人となつたと云われ、親友に富田景周、亀田鶴山、浅野屋秋台、山本与興等の金沢の藩士や知名の人がある。これ等の人達からは竹亭もその個性を形成するうえに多大の影響を受けたと思われるので次にその略伝を附しておく。

〔富田景周〕

富田景周の実父は主税良隣で、景周は通称を縫殿、権佐といい、字を大賚、号を痴竜、韜

照，樓寧齋，樂地，方竹庵，暮松楼といった。

幼にして富田修和の養うところとなり，安永2年2月その統を襲いで禄二千五百石内千石与力知を受け，天徳院請取火消，小松城番，御算場奉行，能州御領地方奉行等を歴任し，文政11年2月21日歳83で歿した。

景周は，書齋を樂地堂と号し，天性伶俐にして，学問を好み，気節があつて遊芸の類は全く嗜まなかつた。経学詩賦を乾祐直に学び，博覧強記にしてその学は和漢に亘り，特に歴史に精通し，「越登賀三州志」・「燕台風雅」等，多数の著書をあらわした。

#### 〔亀田鶴山〕

亀田鶴山は金沢の素封家宮竹屋本家の7代で，片町で薬店を営んでいた。鶴山は分家九右衛門金方の子であつたが，本家の伊右衛門勝延の養嗣子となり，幼名を喜十郎，後伊右衛門といい，諱は勝善，または章，字は純蔵。鶴山，鹿心齋，田善，蘭泉等の号がある。寛政12年家柄町人に列し，町年寄及び銀座の両役を勤めた。最も詩を好み，野村円平や横山政孝等と相会して唱酬し，大窪詩仏が北陸に来遊したときには，鶴山はこれを迎えて，詩を論じたり絵を品評したりして，山に登るにも温泉に浴するにも必ず同道したそうである。文政11年には詩稿を携えて京に上り頼山陽に師事した。その詩は「鶴山遺稿」として世に公にされている。

また喜んで古人の真跡を購ひ多数収蔵し，優れた鑑識眼をもつていたということである。

俳人としては，本家の4代が芭蕉門の俳人として有名な亀田小春なので，その後を継ぎ，小春庵四世と称し，蘭泉の号を用いて活躍した。傍ら画を岸駒に学び，特に墨梅に長じた文雅の人で，白井華陽の「画乗要略」にも「亀田鶴山加賀金沢人初学岩家後法清人能梅墨又工詩」といつている。天保5年9月24日67才で歿した。

#### 〔浅野屋秋台〕

通称彦六，諱は端。金沢の町人で畳製造を業とし，晩年町会所の吏となつた。秋台は其号で，別に戴笠道人・半憎道人・半醉老人・阮蓑野王・端王蓑・海石老人・青蓑道人・恬処道人・息齋・半兼老人・半禅居士・阮鎌人・遂初道人・鉄華居士・阮蓑鎌叟・周台等の号がある。秋台初め松花堂の書法を学び，後蘇東坡の風を慕うて堂奥に達した。傍ら篆刻に巧みで秋台印譜を著し，また茶道に堪能で啓沃軒随筆を遺し，詩を作り戯画を描いた。享年は詳で

ないが、文化12年10月6日歿し、法諡を釈無著という。

〔山本与興〕

山本与興は加賀藩八家の一つである老臣村井家の医師で、諱は美和、茶号は宗節といい、余技として楽焼を製した。その作品の多くは抹茶器で、楽三代の道入に私淑し研究を重ね遂に一派を築いた。黒楽・赤楽共に巧みで、加賀藩主斎広・治脩の好みにより茶器を製したことも度々あつたと云うことである。

加藤恒著「加賀陶磁考草」にも次の記事がある。

「傳來詳ナラザレドモ、常ニ道入ノ製品ヲ愛シ、其一品ヲ見ル毎ニ、必之ヲ模ス故ヲ以テ、遂ニ其印ナキモノハ、世人見テ道入ト誤認スルニ至レリト云フ、」

与興は文化14年65才で歿した。この与興には子供がなかつたので、前田土佐守の医師であつた石浦桂庵の弟である宗悦を養子とし家を継がせた。宗悦も後に与興と称し、製陶もしたが、医業・製陶共に拙劣で父の初代与興には遥かに及ばず、文政12年落魄自殺したという。

与興の弟子には堀越左源次があり、その流れを汲んで名を著したものに尾山屋伊八・小原伊平・原呉山等があり、この派を大樋焼と区別して特に加賀楽と云うことがある。

この様な人達との交友により竹亭もいろいろと影響され、ますますその天分をのぼし、その作品を格調あるものとする事が出来たと思われ、識者の間で竹亭焼が珍重されているのは、この二代竹亭の作品である。

二代竹亭の作品を見て感ずることは、実に器用で巧く、まじめな作者であつたと思われる。

楽茶碗は彫塑的な性格を多分に持つており、たとえば素人でも趣味があり、優れた造形力を持つた人ならば立派な茶碗を作りうるもので、むしろそうした人の作品の方が、職人的作家のものよりも面白味のある場合があることは、いまさういふまでもないことであろう。

二代竹亭は専門の楽焼の陶工と変らぬ優れた技術をもち、しかも職人的陶工の作によくみられるような、小技は効いているがそれなりに作風も小さく纏つてるといつたような型に填つていない。幕末の数寄者の作としては最も良い作行きのものの一つであろうと思われる。

しかし、前にも述べた如く技巧に走りがちなこの時代の風潮や修業した京都の環境は、かならずしも良い影響ばかりを与えなかつたように思われる。その作品は、釉薬に技をこらし、



ことさらに派手な変化を求める傾向があり、茶碗としては、いささか嫌味と思わせるものもある。

しかし、それはまじめに工夫を凝らしたもので、釉薬の技巧は誠に優れており、例の金星・銀星、あるいは鮮麗な朱釉をだしたものなどは、本場である京都の作家でも中々ものし得なかつた実に見事な発色である。

金星・銀星の発明について高道名咲子「越中植生焼史とその遺作品(下)」(やきもの趣味第1巻第6号)に次のような逸話が出ている。

「金星・銀星の作品は生涯に幾十個しか製作して居らず、偶々竹亭が破損した素焼の内で、その型に止み難い執着を持つものがあり、銀の針金をもつて破損した箇所を巻き再び窯に入れた。そしてその焼き上つたものを見ると、意外にも銀が熔解して上薬に混り銀星をちりばめた様に見えたので、却つて予期せなかつた好結果を得た訳で、それが銀星楽なるものの発明の初まりで、失敗が成功した珍しい話である。」

二代竹亭の作品は黒楽が主で、そのほとんどが茶器であり、銘を入れた作品や共箱のものは非常に少い。作品に用いた印には丸印で「信」と読めるものがあり、この書体は狩野派の画家がよく用いており、茶碗に画かれた宝珠等の絵も狩野派の様式であるので、二代竹亭は狩野派の絵を学んでいたのではないかと思われる。

箱には、この「信」の印も用いているが、他に糸印かと思われる印を二・三種用いているようである。しかし、これを作品にも用いたかどうか解らない。また、箱書に花押を書いたものもある。なお、大三郎も柳谷と号し製陶に励み、竹亭は窯焚きに優れ、大三郎は形造りに優れていたといわれる。

### 三代竹亭

二代竹亭伝右衛門は福光の喜三郎の娘と結婚し、寛政元年に長男の伝三郎が生れた。これが三代竹亭で、太田家の23代である。

伝三郎は長じて新田裁許、礪波郡年寄を仰付けられ、名を佐次兵衛と改めた。

天保10年に十村となり苗字名乗りを許され、嘉永3年7月には平十村列の待遇を受けた。また、公務のかたわら父に楽焼の法を学び、柳山と号して楽焼に従事した。しかし、そのうち楽焼のみでは満足できなくなり、現在の護国寺八幡宮社務所の後方に登り窯を築き、九谷・瀬戸・伊万里等を倣つた磁器をも製する様になつた。錦窯を築き絵付の法にも金や銀を

使用したりして種々苦心を重ね、安政5年から文久元年の間、当時名陶工と云われた初代横萩一光を招聘し、製作したこともあつた。

その作品の主なものは大衆向きの徳利や盃、皿、鉢等の日用雑器であつた様である。楽焼の方では特に黒の中に紅の出す法には大分苦心をし、飴釉や梨地黒についても原料の配合や、釉薬の塗り方、ふいごの使い方等に細かい注意が払われたといわれる。

三代竹亭は文久2年72才で歿するまで、長年の間には相当数の作品を造つたと考えられる。名工であつた父の二代竹亭に直接習い研鑽を積んだ人だけに、その作品の中には優れた作もいくつかあつたと思われるのであるが、その大部分は二代竹亭の作品と混同されている様である。

しかし、二代と三代の作品で問題となるのは黒楽の場合であつて、それ以外の赤楽等の場合には二代竹亭の作と云われる作品でも、その大部分は三代の作品と思われるものが多く釉薬も初代よりもおとり、その作風も弱いものが多い様である。ただその極手になる各々の在銘の作品がまだ発見されないのは残念である。

原料の土は向山、よしじ山、小森谷等のものをよく使つているが、彩薬の原料等で地方で求められないものは京都の茶碗屋長兵衛より取寄せている。

これら原料を京都より運ぶのに、数十貫の俵などは陸送では大変だつたので、まず大阪に出し舟便によつて伏木あるいは金沢の港（金石）に陸上げし運んだようで、その費用は莫大にかかり趣味としてならいざしらず、事業としては到底引合わなかつた。

磁器類を製するようになると、大衆向の日用雑器を主に製作したものの、これも経済的には採算がとれなかつたようで、三代竹亭の柳山が文久2年72歳で歿し、初代竹亭以来80余年続いた竹亭焼は全く廃窯されるに至つた。

## 結 び

竹亭焼について問題となるのは二代竹亭の楽焼である。

竹亭が風流の生活を楽しんだ江戸後期の時代は、町人が風流を競いあつたり、各地に窯業が起り、陶磁器が一般庶民の日常生活の中に深く浸透していつた時代である。また、光悦を初めとし趣味の作陶も、元禄・享保を経た頃から、もつとも広く行なわれるようになり、趣味がこおじて専門陶工の道に入つた人も多数輩出している。

竹亭焼はこの様な時代の性格をよく現わしている標本のような存在である。しかし、加越

国境の一寒村に、京都の一流の陶工に比肩しうる陶工がおり、しかも、その作陶が名利を求めてのようなものではなく、壮年の頃は公職を全うし、その後に志して京都に上り修業をするといつた、幕末の庶民として円満な生活のなかからの風流の作陶であつたところは、大いに賞揚すべきであろう。作品にもそのまじめな生活態度はよく現れ誠に健全である。

また、北陸地方には加賀の金沢に既に述べた如く、竹亭以前から楽焼では、大樋焼があつた。しかし、これは昔から例えに「大樋に黒なし……」と云われ、全く黒がなかつた訳ではないが、大樋焼の特長は赤茶色の飴釉である。そこへ京都の本格的な黒楽を北陸地方へ輸入したのは竹亭で、その黒楽は加賀楽の代表者と云われている山本与興につながっている。すなわち与興の黒楽は竹亭に学んだもので、与興の作品には多分に竹亭の影響が窺われる。この点北陸の楽焼を考察する場合、重要な歴史的意味を持つており、見逃がすことの出来ない窯である。

## 図版説明

- ①……大樋焼の飴釉をかけた、初代竹亭作火入。
- ②……二代竹亭が京都で修業をしていた時代の赤楽茶碗。
- ③……②の高台、楽の印がある。
- ④……二代竹亭作、黒楽の水指。
- ⑤……④の印で信と読める。
- ⑥……箱に捺した⑤の印。
- ⑦……二代竹亭作、宝珠の黒茶碗。
- ⑧……二代竹亭作、銀星の茶碗。
- ⑨……二代竹亭作黒茶碗。技巧は優れているが、少々技巧に溺れた感もある。
- ⑩……二代竹亭作、黒楽茶碗の高台、③の高台と比較すると大変な進歩である。
- ⑪……二代竹亭作香合、技巧は非常に優れている。
- ⑫……二代竹亭作という「清風」の額。
- ⑬……二代竹亭の印という。
- ⑭……二代竹亭の花押。
- ⑮……三代竹亭作と思われる赤楽の平鉢で、梅図は南画風である。
- ⑯……三代竹亭作と思われ、作風は⑮と似ている。
- ⑰……三代竹亭（柳山）作蓋置。
- ⑱……⑰の「文化年製 柳山」の銘。